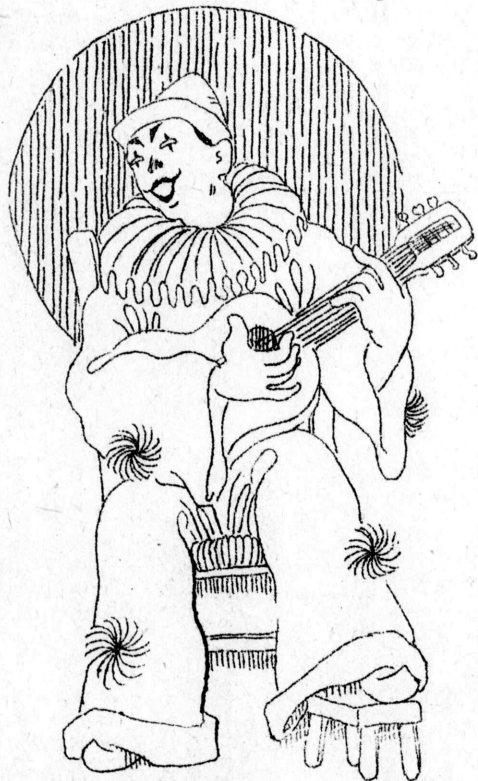


報時了然爾亞

錄附藝文

号四世大

卷五第



Marzo  
de  
1930

Año V  
Núm. XXXIV

Suplemento Literario  
"El Argentino Dijo"

小説 流浪 (三) 狂自生

A・N山脈の麓にある一つの村落。國道鉄道の終点に金山(ミナス・デ・ストロ)のある所はチレシートと本小町である。平凡と單調な景色のアルヘンティナ——標線一本で描き得る……と云った様なパンパスの情景を離れて山脈の麓に来た秀夫たちは心算も一変したのであった。

精神に美を味ふ余裕……山水の美に魂を奪はるゝ位な詩的情操があれば、肺病ふんてすむ治るよ。見給へ、昨日より今日、今日より明日は君の血色が必ずよくなるよ……と、緑島は元氣をつけるのであった。

安いペンションに泊つて、緑島は三日目に町はずれに古い土堀造りの一室を借りて来た。秀夫の残金では二人の生活に幾月もはすじせなかつた。詫かしい町はずれの借家に移つた緑島達は簡單な自炊道具を買つて来て、半年や二年の滞在の準備をしたのであった。

緑島は鉱山に仕事を求めて毎日仕事に行つた。日給ペンションの賃金は生活費の安いチレシートでは、日曜日に二人が飲む「デレベトサ」の一本代を餘すに充分であつた。

晝間、緑島が鉱山へ行った後の留守は、可成り淋しい思ひをしてゐた秀夫は、時々町の外に散歩に行つたのであつた。町を一步外に出れば、未だ田舎の風物は太古の姿そのままで、一里も山奥に進入すれば、弓矢を持ったインディヤ達や半裸體で裸んでゐる。

月夜の晩などは、サホテン山で焚火をしながら、「ギターラの乳調子に合はせて、四五十人の男女が入り乱れて踊り狂つて

ゐるのを、時々秀夫は見たのであつた。緑島が友の爲めに働いた彼の仕事は八時間労働でトロツコに鉱石を積んで押すのであつた。可なり強い仕事。過激な労働であつたが、病友の爲めだと思へば、彼には何の苦痛でもなかつた。

「君……ほんとうに済まないか、毎日の労働で體分瘦れるだらうね……」秀夫は仕事から帰つて来た緑島の手を握つて云ふのであつた。「サア、僕も仕事で、半分は遊んでゐるんだよ。君こそ一人で淋しいだらう。明日はモンテの方に一度遊びに行つて見給へ……サア、マテでも飲むか……」

と、事も言ひださつた少しの苦痛も見せぬ緑島の態度を見ては、秀夫は心に泣き下ら感謝するであつた。その年の冬はすきで、亞熱帯のチレシートにも春が訪れた。新緑は再生した。

鉱山所の所長はサンチロン・カストロ氏と云つて、ナリス州選出の上院議員A氏の弟であつた。夙來名望共に堂々たる紳士で、一般の人より人気がよい人であつた。終日汗みごろになつて働く二日本青年は、鉱山の人々の話題になつたのである。『さう、日本、ロマンティックな探検日本より来るとある一人の日本青年、病友の爲に毎日働いてゐる緑島の風評が、いつか所長の耳にも届入つたのであつた。』

ある日の午後の休憩時間に、緑島はトロツコの上にホルサを敷いて休んでゐた。其の目所長サンチロン氏は一人の秘書と、休憩時間に鉱山を廻つて居た。『トトロツコの上に休んでゐる緑島を見ると、急いで歩いて来たのであつた。所長の直すいたのを知つた緑島は、破れが、つた鳥打帽に手をかけて会釈した。』

『アエナス・クルデス・セニョール……』

所長はおだやかで笑顔を彼を見た。

「ケ・タル、ホーヴエン」  
暫くして所長もトロッコに腰を掛けた。緑島は思った。

「……フンデる程、平良的ふ男とは聞いて居たが……ナル程碎  
けてゐるわい……」

所長は日本の話しや東洋の話——また緑島の病友、秀夫、事  
まで親切に尋ねた。

渡航後、流浪に流浪をつけた緑島はスペイン語は余り堪能  
でなかつた。けれども、丁大字当時より語学は可ぶりの得意  
で、ドイツ語と英語は自由自在であった。

サンチロン氏は、鉱山で専攻の爲め、五年前留学した  
経テのある男である。二人の会話はドイツ語になつた。ドイツ語  
の判らぬ松島は、目をクル／＼とせてゐた。

風景絶可、日本、進歩せる医学や、古典的な美術などは、サ  
ンチロンの憧れの的であつた。

労働者には情、ししい人物……トロッコ押しには勿体ない男——  
と思つた所長は、早速事務所を尋ねて見へたのであつた。

緑島は事務所を簡単で会計事務と見る様になつた。  
それと共に、子レシートに在る国立肺病々院院長ドクトル・マル  
チネス氏を彼の病友、秀夫の薦めに紹介して受けたのもその  
日であつた。

「松村、堪び給へ、僕もいよく事務所の方に廻つたよ。それに  
明日は一日休暇を受れたんだ。所長の叔父、可ぶりに話せる男で、  
色々面白い話をして居たよ。それから明日は愈々病院に行つて  
最う一度診察を受けて見やう……見給へ、此方紹介状をく  
れたよ……」

と出して見せたのは、亞細山所長サンチロン、カストロ氏より  
国立病院長ドクトル・マルチネス氏に、緑島の病友、松村秀夫  
の病状をよく診察して受けて受れと言ふ意味の丁寧なる紹介  
状であつた。

× × × × ×

「二イのカメラには緑島一人になつた。  
所は死なぬもの、如く寂として眠りに入つてゐる。  
そこ冷へのする寒気がせし／＼とせめて来る。外套の襟  
を立てた緑島は尚も理想にふけてゐる。

……ブラジルの和洋園——日本のK子——松村の病友——  
カボテン山の霊場——所長の妹、パウリーナとの奥……秀夫の  
遺言、血を吐つ、苦し、歎した女の遺言!!、子レシートと吸巻し  
てより、カナカスタに流浪……而しあの時が一番嬉しかったのだ。  
真実の心友、松村とよく飲んだ葡萄酒の労働——地下監獄の秘密  
曝露場のかくれ呑み……吞み過ぎて地下室で寝すこした時の  
滑稽……それから北ツクマンの流浪——秀夫の病友再逢……  
土人の野場の夜明し——カボテン山の秀夫の病友再逢……  
彼はそれからセントレリアの流浪……そして今このハンパの牧  
場に今何をしてゐるのか……」

次から次へと、夢想にふける彼の青ぶめてゐた蒼白い頬を  
際間渡る冷たい風は容赦なく淋しさに誘ふ——寂々と孤  
独の呻き、彼を理想から呼び起したのである。

夜の一時半。

ハンパの田舎道と馬は黙々と歩むのであつた。  
牧場の夜までには最う二十分もすれば着くであらう。

只は止んで、晴れた冬空には青い星がきらめいてゐる。  
夜の自然は静寂そのもの、如く馬の蹄のみが、いよく、

馬脊の鼓子は未だ何を考へてゐるのか。

破れかけた外套の襟を立て、時々す、り泣く音がした。

(つゝ)

短篇 無題

元子ヤン

秋が更けて、霜を帯びた風が吹く頃になると、自然も  
どうやら装を委へて来る。  
遠山の眺めも、し、紅葉も美しい。ヒューツといふ  
音につれて、火の断片が澄切った大空に舞の上る。こ  
も澄んで来る。そして又沈む。やがてそれが絶寂の情  
に委つてヒシクと思つて来る。

彼はその頃の盛明な空気を通して、感情を綴ぐん  
で寫す事が大好きだつた。が、何れも絵には作り難い。  
レンスの描寫は恐ろしく繊細なものだ。面皴や雀班  
等は眞物より以上に描出する。だが色の方にいたつては、  
色音と同じことだ。

彼は雨殿に笠の台をたくして、葉の落ちた柿の木に、一  
つ、二つ名残をとめる赤い実が、迷ひ雲すら見られぬ  
大空と背景にして寫し出してみせるシルエツトを眺め  
ながら、絵にふらふらふいものと無理やりに絵にして見様  
と下駄をすりへらすのは馬鹿なこつた。こゝろは時は  
苦しい金を工面しても、四畳半におさまつて、右手の運動  
を始める方が自分には大賛成だし、又其の方が合理的だ  
と考へてゐた。

そこへ、走練が踵を叩きやつて来たからたまらふい、早  
更合理的と思ふ方へ直とつた。

静寂が座を立つと、裏返は貞奴に

「この人、静寂に……」

と云ひ得ずし所を眼で話した。

「まあ……」

と、貞奴はお、ぎやう、ちいぶをして見せた。

貞奴は彼の耳元で私語した。  
その秘密は静寂が「嫌よ、嫌様」と云ひながら、無理に隣  
らせられた「雨シヨボ」の終りに、ホンの一瞬、すきとほる格好  
で、見せるのを恐れてゐる彼女が、眼にうつた時から彼の  
心の何処かに潜在してゐたもんだつた。

貞奴に私語された事が、まわりど、うらうの様に次から次  
と同じ早やきで頭の中を廻る時、彼は酔はずにあられた  
かつた。

彼は恐ろしいまでにあふりつめた、そして急流の様  
に、はげしい勢で体内を流れた。  
「どうしたの元ちゃん」と、静寂がよりよつて、盃を奪はれ  
た。庄は知つてゐるが、其の後は夢中だつた。

蒸室におそはれて眼がさめた時は、静寂が母家につけ  
てある石橋の上に腹はいにふつて、其の上に静寂の羽織が打  
掛けられてゐた。

「あら、おめあめ……」  
と通りが、りの女中の声に裸が回つて酔のさめた彼女の顔  
が、そして貞奴が姿を見せた。彼女は「あんたは罪ですよ」と  
言ふ様な微笑を口元にうかが、意味深い眼を貞奴に向け  
てゐた。

頭の重い彼であつたが、其の視線を見た時計の様な鏡で、或  
る不安を直感した。もしかしらたらと云ふ不安は……次の  
瞬間、疑ふ余地のない事実として現れて来た。静寂の目には  
涙が光り、唇はすすりに震へてゐた。

彼は断崖に立った思ひがした、と同時に肩が落ちてゐる  
た。静寂の顔がグラ／＼とゆれて、蓋した。  
彼は淋しい様か笑いたい様か、妻が気持ちはおそられた。  
突然  
アハハハハ……  
と、全く不釣合な爆音が、彼の口から家中にた、さつつけた。

(終り)

詩

死んだ  
労働者の話

丘谷啓一即

俺の血の量り賣りが初まつたー！  
つてねー

そうしたら色んな奴等が  
手に手に鎌を下げて出て来たよ、  
俺はそこで、  
心臓のあたりに  
メスを刺したんだ  
ポトポトと血が流れた  
苦しいやつて？  
若しいさ、然し其の中に  
心地よさもあるね、  
さうすると奴等は  
一滴もおしこつて  
奪ひ合つて  
奪ひ合つて  
おし合つて  
罎に一杯なまつたら  
一銭の金でも  
少く拂さうとするんだ、  
俺はまた叫んだ  
正当な血の賣代を受けろー！  
つてね  
俺は金がとれると

面白くなつたのさ、  
俺はもう  
自分の血の無くなるのを忘れたんだ、  
金が山の様になつて  
俺の前に積まれた時  
俺の血潮の  
最後の一滴が  
賣りつくされた時だった、  
樹が泣きにふつた、  
月が消えて去つた、  
雲が霧になつて蚊と一緒に  
飛んで去つた、  
さうすると  
此処は何処か？  
此処は人間の云つてゐる  
Utopiaさ、

わが心  
伏舟

わが心  
何処にありや  
秋近づき  
梢さ渡る風は  
何をか語る  
身は煩惱の巷に  
徘徊して

行方も知れず  
迷へり、

わが心  
何処にありや  
しとくと降る  
なやましき 弥生の雨  
すいり泣く  
魂の青きゆし姿  
あ、  
思ふ人處に盡く  
去りて又帰へらす

わが心  
何処にありや  
自我を没却すれば  
かすかに射し来る  
真如の光  
常照の世を覆して  
その光！  
その光！  
その光を乗へ給へ、



S君の日記

南國浪人

七友S君の日記を繕くと、黒い表紙の裏にこう云ふ文句が書いてあった。

「どんよりと曇り行く大空を眺めつゝ、思はいつし君の胸に咽び入る。噴形見のデスマスの若木よ、誰が胸中の秘密を知らうぞ。あはれ夢が幻の世に長らへて、君はぬきに泣きつゝ、空しく消えゆく身の儚さよ。来し方は煙の如し世一嘆

いでや彼が悪の白兵戦を演じた頃から死に至るまでの日記の一節を世に紹介しよう。

二月一日

僕はほんとに馬鹿だ。気直ひだ。先方の精神も探らぬいままんと愚に陥つて居る。今日ふんが何だ一處に彼女の店に行かふかつたからと言つて、そんなにまで気懸りするではな。その癖向の合つてはビク／＼者で、何一つの談話さへ左向け得ない。言はんとして唇を慄はせると云ふ具合、懐病者の常として見て見ぬ振り、度々態度で几帳面を覆付して居るのが自分ながら笑止しい。それが若し、地の貝の片思ひだつたら彼女がらどんかに侮辱せられて居るだらう。ア、苦しい。苦しい。

七月二日

昨日一日見ふかつた為めが彼女が非常に悪しくなつた。今日は真顔を見てニコリ笑つてやらうと持ち構へてよ時分を見計つて行つたら生憎馬車が渋山あるし日本人や其他に自分ぞ日頃嫌つて居る毛鷹(ゴキウ)したる彼女のノース(No.1)も座つて居るので引つ返して暫くM街の一角にたゞみ再びやつて行つたら彼女は恰も待ち兼ねて居たかのやうに門口に立て返つたので一寸会釈して内に迷入つた。

どう見ても奇麗な子だと思はれてなげね、今日はずの外実みこはれて居るので常々思つてゐる事を打明けて見やう。幸ひモーソが居るから好機逢ふべからずと、まじり逢ふかつたが話の糸口を持ち出す為には、  
「貴女は病気でありませんか」と云つたら「何大丈夫です」と、彼女はニコリ笑つて美しい顔を掩ふた。彼女は自分のチアールの面前にある机に小腰をもたせながら色々の話をした場合  
「此れと日本とどちらがよいですか」  
「日本がよいです。日本は実に美しい国です」と答へた。彼女はからかう様に  
「ノースが居るからでせう。成程それでせう」と云つた。美しい顔と突出して自分の心を讀むかのやうに訊く。  
「居ません。決して居ません。答つて……」  
「三、三歳続けたら女つた。なほ附け加へて自分には大なる希望あり理想がある此の人は誰せよいと感嘆つた後  
「貴男こそ、ノースが居るでせう」と訊いたら  
「ハイ居ます。私のノースは佛蘭西系の人です。併しまた右いから、この二三年後にハンズリマまりませう。」  
自分の心は一大變機を持つて粉砕せられたかのやうに感じました。しかし自分も男である。こんな時色に現して弱身をいせせはならぬと氣を引き立て、大に悪愛問題を論じ彼女を煙に捲いた。

最後に「是と云ふものは盲目ではいけない」と、諷刺的に吾忠告の積りで云つたが、其時の自分の言葉は僅に震えて居た。  
彼女は黙つてうなづいた後  
「もし貴方あなた御婦人は必ず日本人に限りませんか」と訊く。

(以下次号)

短歌 おもひ 幸美子

いつしかに其日くを待ちわびて  
淋しく結ふわが想の状。

云ふ人も書く人も亦罪あらじ  
奇しきふたりの宿生にあれば。

夕まぐれカシノの路に珍らしの  
人には解けぬ虫のささく。

ひたふるにおもひせまれは虫の音は  
パンパのはてへわが塊さぞふ。

つく息の霜と化しなむ寒き日も  
我塊焔ゆる炎の如し。

徳利夜話 丸田 黙

氏は上。名は土瓶。字は徳利と曰ふ。  
常に物立はず。云へば必ず驚々と云ふ。満ちては樂座す樓  
閣の御屋。起ちては交る歡宴の友。我が物類に高擡に列不  
り。時の更くるを知らず。空しければ棄て、顧られず。  
色常に失せず。時來れば必ず坐す。陽氣を増し同仁の愛を  
以て匿へらる。偶々喜ばぬ人あれども。吾が罪に非ず。  
飲めや人。喰めや人。舞めや人。慎めや人。

二 高潔不藝比べ

史にてきく工内匠。河成徳はる。

心して吹け秋風の友。

三 風俗下馬評目くら鼻くその潮笑

散にすべく虫の音喧し

たがき。わけて語さだめせん。

批評欄 感想と鑑賞的批評

在口市 石井清造

私は私の知人に対して無意識に失敬してゐる。  
然しそれは私の知人の考へる株不無夢想ではない。争  
る華敷の念を以て対してゐるのです。  
論ずつてのは最早時代じゃあないのですから。

私は放浪つて事を知らず。  
私の短い年月の経験に依れば放浪は實況だ——で  
私の生活は灰色で單調なマンネリズムです。  
それを表現する様式も亦？

私は私に対する批評を皆肯定する。  
でも何分々の註解を加へての事です。  
それこそは、私の人生途上に於ける試煉なる故に。  
弱者は多く吠へ、強者は黙する。  
金権力を用ふる。それは「私は弱者ですつて云ふ」告示です。  
強者達が彼等のために悲しんで下さい。

全人諸君  
附録とせず、半ヶ月刊が、月刊か、まとまった文藝物と  
創刊発行したらどうです。

散見する黒潮氏よ。

氏は黒潮と何と解してです。

黒潮とは赤潮に対するアナリズムの事ですよ。まさか、

氏は無政府主義者じゃありませんか。

氏の作品を見る時、氏よ、アナクロニストでかい様に。

多作が、盛つる乱雑なつゆ氏の作品を讀む時、文句ふし

に頭を下げる。

でも、その多作の反面に粗作の間々ある事を忘れてはいけ

ませぬ。

免に角、生田香月を思はせる氏は在野同胞中一位に位する

詩人とするは邪眼か？

オニの故郷、幻滅、りき世

有閑者のパサティエホに、書き綴つた文字の羅列と云ふ感

じです。

まさか時報紙上批評家に対して——盡く退廃すべし——

と云ふ不信任決議状じゃありませんか。

私は氏のたのみにあへて苦言を呈する。

掲載したは編輯者の責任であるにしても……

或景色 比雅 油氏

私は是を讀んで、文学校出の若與様の経済法つてのを感じ

た。野心的な何となく青白インテリのハイロイズムです。

詩とせず、小品とすべきでした。

彼奴等は——北岡健氏

先月中の不振が怠慢の作品の中に、是は？と思はせた

作です。

作者よ、共に口吟でぬたいものです——とは云へ、目的意識

で書かれた以上、その次へ「だから」を加へるべきじゃあ

いでせうか？ あれぢや屋のふい一九二九年のものです。

心は……北岡氏

彼は病める……丘谷氏

聯々として流れてるエトランジエの悲哀！

共に内容に於て近代人共通の悲哀の人生詩です。そ

て後者の新感覺派的表現手段に敬意を表する。

共に良く現実を掴んだ作です。

夏の日 てい子

る葉集を思はせる女ふらでは見られぬイテ筆です。

氏の筆筆を祈る。

小説「流浪」狂自生

私は前編も後編も知らない。それ故に長篇の批評は私と

して不可能です。

三・一八

校書家諸君へ！

◎紙上匿名は差支へず、住所氏名は明記のこと。

◎論文、創作、隨筆、別に規定は設けません。

◎和歌、俳句、題は隨意。

◎原稿は明瞭に願います。

編輯部